

レーラインの鍵盤楽器教本研究 2

— 装飾音教程の研究 —

小野 亮 祐

(2006年10月5日受理)

Studien über Löhleins Clavierschule 2

Ryosuke Ono

Löhlein schrieb erstmal seine Clavierschule 1765. Anschliessend vermehrte er sie 3 mal, danach noch anschliessend wurde sie von verschiedenen Musikern 5 mal vermehrt. Insgesamt wurde sie 8 mal vermehrt. Ich erforsche momentan über die Vermehrung von 1. bis zum 9. und zwar letzten Auflage. Bei dieser Studien will ich über die Änderung von Verzierungsteil in der Clavierschule von der 1. bis zur 6. Auflage. klar machen. Aus dieser studien merkt ich fogende 2 Punkte. Je vermehrte, 1: desto systematischer die Erklärung über Verzierung ist, 2: desto detaillierter.

Key words: G. S. Lölein, Klavierschule, Manieren

キーワード: G. S. レーライン, 鍵盤楽器教本, 装飾音

はじめに

本論考は筆者が継続的に行っている『レーラインの鍵盤楽器教本』の研究の一部である。この教本は、初版が1765年に出版されのち8回改訂され合計9つの版が出版された。第9版は1848年に出版されており、約1世紀にわたって出版され続けた。現在筆者はそこに着目してこの教本の改訂上の変化を追い、18世紀半ばから19世紀半ばまでの、文字通りバロック時代の出口から古典派をへて後期ロマン派へ至る鍵盤楽器教授、鍵盤楽器音楽、鍵盤楽器の役割、これら相互の関連の変化を明らかにしようとしている。

そのなかで本論ではレーラインの教本の第6版までの装飾音の教程に焦点を絞りその変化を追い、考察をするものである。

手順としてはまず、第1版における装飾音教程の詳細をまとめて示し、そこから第4改訂版までをまとめて比較検討し、若干存在する字句の相違点を指摘する。これは、既出の拙論¹⁾において指摘したように第1から第4改訂版までは大きな変更点が見られず、従って大きな内容の変化はない反面、若干存在する字句の相

違は是非ともここで明確にしておきたいからである。

そして、次に大きな改訂がなされる第5版と第6版それぞれ個別に装飾音教程の内容構成をまとめる。

そして、各版の内容構成をまとめたところで、それを利用して初版から第4版まで、第5版、第6版とこの3者の比較という形をとることで第6版までの変化を追うこととする。

I. 初版から第6版における装飾音教程の内容

I-1 第1版における装飾音教程

1765年に出版された第1版においては第6章全体が装飾音教程に割かれる。内容は以下の通りである。原典における段落番号 (§) は項目のあとに記しておく(以下本論全体にわたって同様に示しておく)。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第6章 「前打音並びにそのほかの装飾音、もしくは Manieren について」

1. 前打音について (§ 1)

譜例と共に以下の3つに前打音を分けて説明(論

文末譜例1参照)

- a) 後続音の半分の音価を前打音を持つ場合。
 - b) 後続音の3分の1の音価を前打音を持つ場合。
 - c) 後続音全ての音価を前打音を持つ場合。
2. 前打音以外の装飾音について (§ 2, 3, 4)
- ・前打音以外の装飾音を Manieren と言うこと。
 - ・Manieren の記号を初めて公にしたのは C. P. E. Bach であり、それまでは、音楽家の秘密事項だったこと。(§ 2)
 - ・初心者への配慮について(多くの装飾音を教えるべきではないこと。(§ 3))
 - ・Manieren 一覧表(論文末譜例2参照)
この一覧に含まれる装飾音は以下の通りである。
なお括弧の中のに表記は原著表記である。
トリル (Das simple Trillo)
下からのトリル (Das Trillo von unter herauf)
上からのトリル (Das Trillo von oben herein)
プラルトリラーもしくはアプツーク
(Der Pralltriller oder Abzug)
短いモルデント (Der kurze Mordent)
ドッペルシュラク (Doppelschlag)
後打音付きアプツーク (Abzug mit Nachschlag)
短いシュライファー (Der kurze Schleifer)
長いシュライファー (Der lange Schleifer)
短いアンシュラク (Der kurze Anschlag)
長いアンシュラク (Der lange Anschlag)
付加音付きドッペルシュラク (Der vermehret Doppelschlag)
 - ・初心者にはトリルとアプツーク(前打音)、モルデント、ドッペルシュラクで十分であること。(以上 § 4)
 - ・テンポと装飾音の早さについて。(§ 5)
 - ・トリルには原則として後打音をつけること。そしてその後打音は一番早く動くこと。(§ 6)
 - ・このように早くなることはアプツーク、モルデント、ドッペルシュラクでも同じであること。(§ 7)

I-2 第2改訂版以降の変更点

第2改訂版から第4改訂版までの相違点を明らかにしておこう。

第2改訂版における変更点:

- ・ § 2 において最後に「ほとんどの Manieren の記号はフランス人のクーブランから借用した物である」の一文が加わる。

第3改訂版における変更

- ・ § 1 において、例示される前打音の種類が一つ

増える。それは、「前打音のついている音の音価がきわめて短い場合について」であり、d) とし提示される。(論文末譜例1参照)

- ・ § 4 において、Manieren に Bebung が追加される。(論文末譜例2参照)

- ・ 第2改訂版までの § 6 と § 7 が統合される。この際の字句の変更はない。

第4改訂版における変更

なし。

I-3 第5改訂版における装飾音教程

第5改訂版は1791年に出版された。元の著者レーラインは既に1781年に亡くなっており、代わって Johann Georg Witthauer が改訂を行っている。

章立てでは大きく変わり、1-4版までは1つの章で記述されていた前打音と Manieren であるが、この版ではそれぞれが独立した章を持つようになっている。

.....

第7章 前打音について

1. 前打音についての概要と、2種類の分類分け(可変=長い(Veränderlich=lange)前打音と、不変=短い(Unveränderliche=kurze)前打音 (§ 1, 2))。
2. 可変=長い前打音について(3つに分類)
 - 1) 前打音の付く音が2分割出来るとき。
 - 2) 前打音の付く音が3分割出来るとき。
 - 3) 前打音の付く音がタイで直後の短い音と結ばれている場合。
(以上 § 3)
3. 不変=短い前打音について。
短い前打音となる場合の例10個を挙げる。
 - 1) 曲の始まり。
 - 2) 跳躍進行する音に付く前打音。
 - 3) 前打音とそれの付く音両者が跳躍関係にある場合。
 - 4) 同じ音の繰り返しに付く場合。
 - 5) 4音ひとまとまりの音型の前。
 - 6) 2音ひとまとまりの音型の前。
 - 7) 3音ひとまとまりの音型(8分の6拍子など)の前。
 - 8) 6音ひとまとまりの音型(8分の6拍子など)の前。
 - 9) 3連符の前。
 - 10) 付点音符の前。
(以上 § 4の前半)
4. 初心者のための前打音の書き方についての提案。
長い前打音では実際の音価を書き、短い場合は小音符でかき初心者に混乱を招かないようにする。

(以上 § 4 の後半)

5. 前打音の奏法上の注意

- ・前打音は音価分だけは必ず保つこと。
- ・前打音にアクセントを置くこと。

(以上 § 5)

- ・前打音の付いている音(主要音)が同時になる音を他声部に伴っている場合、かならず、その他声部と同時に前打音を打鍵せねばならない。(以上 § 6)

第8章 Manieren 装飾音について

1. 装飾音についての概説

- ・装飾音の役割
- ・装飾音記号は音楽家の秘密事項であったが、C. P. E. Bach によって初めて公になったこと。
- ・そのほとんどはクーブランからの借用であること。

(以上 § 1)

2. 初心者が学ぶに当たっての注意

- ・初心者のうちから装飾音を学びはじめること。
- ・ただし、簡単なものからはじめること。

3. 各種装飾音の例示

1) トリル (Triller)

- ・単純トリルと後打音付きトリルの譜例。
- ・トリルの表し方・記号。
- ・小節をまたがるトリル。
- ・下から入るトリルと、上からはいるトリルとその譜例。
- ・初心者がすぐトリルを学習する必要性。

2) プラルトリラー (Pralltriller)

- ・通常のプラルトリラー。
- ・楽曲の切れ目におけるプラルトリラー。

3) モルデント (Molde)

- ・長い音符に付くモルデント。
- ・短い音符に付くモルデント。

4) ドッペルシュラク (Doppelschlag)

- ・通常のドッペルシュラク。
- ・主要音の後に付くドッペルシュラク。
- ・付点音符の付点上に付くドッペルシュラク。
- ・ドッペルシュラクに変位記号が付く場合。
- ・逆ドッペルシュラク(下から入る)とその使用。
- ・プラルトリラー的・ドッペルシュラク(後打音付きのプラルトリラー。(さらに、Abzug が付く場合と付かない場合に分ける)
- ・2つの前打音の付いたドッペルシュラク。
- ・シュネラー的ドッペルシュラク。

5) シュライファー (Schleifer)

- ・長い場合。

- ・短い場合。

6) アンシュラク (Anschlag)

- ・長い場合。
- ・短い場合:しばしば2重前打音と説明される。

7) ベーブンク (Bebung)。

(以上 § 2)

I-4 第6版における装飾音教程

第6版は1804年に出版された。改訂者は August Eberhard Müller (1767-1817) である。ここでは再び前打音もそのほかの装飾音も一つの章で取り扱われるようになる。その内容は以下の通りである。

第7章 装飾音について (Von den Verzierungen)

I 装飾音の概説

1. 装飾音 (Manieren) とは (§ 1)

2. 装飾音の大分類

- 本質的装飾音 (Wesentliche Verzierung)。
 - 恣意的装飾音 (Zufällig/willkürliche Verzierung)。
- (以上 § 2)

II 本質的装飾音のうち音符で示されうるもの。

1. 前打音 (Vorschlag, appoggiatura)。

1) 前打音の分類。

- 可変前打音 Veränderlich-lange Vorschlag。
- 不変前打音 Unveränderte-kurze Vorschlag。

(以上 § 3, 4)

2) 可変前打音とその種類。

- a) 2分割できる音符に付く Vorschlag。
- b) 3分割できる音符に付く Vorschlag。
- c) タイでつながれた音符に付く Vorschlag。
- ・和音のうち最上声部に付いた Vorschlag。
- ・和音のうち中・下声部に付いた Vorschlag。

(以上 § 5)

3) 不変前打音とその種類。

12のパターンで説明。

- a) 曲頭の前打音。
- b) 同じ音の繰り返しに付く前打音。
- c) 跳躍音の前に付く前打音。
- d) 前打音とそれの付く音(主要音)が跳躍音程の関係になっている場合。
- e) 繰り返される同一音型に付く前打音。
- f) 付点につく前打音。
- g) シンコーションにつく前打音。
- h) スタッカート音につく前打音。
- i) 2分割音型の場合。
- k) 3分割音型の場合。

- 1) 3連符につく場合。
 - m) 6連符につく場合。
- (a-mまでのアルファベットは原著と対応)
(以上 § 9)
2. 後打音 Nachschlag について。(§ 10)
 3. アンシュラク Anschlag (Doppelvorschlag) について。(§ 11)
 - ・通常の場合 = Vorschlag とほぼ同じような扱い。
 - ・付点音符についた場合。
 4. シュライファー Schleifer について。(§ 12)
 - ・通常の場合。
 - ・付点音符に付いた場合。
 5. シュネラー Schneller について。(§ 13)
- Ⅲ 本質的装飾音のうち記号で示される物。
1. その種類の提示。(§ 14, 15)
 2. トリル。
 - ・基本的なトリルの種類。
 - a) トリル後打音付き。
 - b) トリル後打音なし。
 - c) トリル下からの付加音付き。
 - d) トリル上からの付加音付き。
- (以上 § 15, a-dのアルファベットは原著に対応)
- ・トリルの上の音(補助音)の音高が変化するとき。(§ 17)
 - ・和音でのトリル。(§ 18)
3. プラルトリラー Pralltriller (Halbe Triller)。(§ 19)
 4. モルデント。(§ 20)
 - ・長い音符にモルデントが付く場合。
 - ・短い音符にモルデントが付く場合。
 5. バッターマン。(Battament) (§ 21)
 6. ドッペルシュラク Doppelschlag。(§ 23, 24)
 - ・通常の場合。
 - ・前打音に付く場合。
 - ・音と音のあいだに付く場合。
 - ・付点音符に付く場合。
 7. その他希な本質的装飾音。
 - ・逆ドッペルシュラク (umgekehrte Doppelschlag)。
 - ・シュネラー付きの前打音。
 - ・プラルトリラー的ドッペルシュラク (Prallende Doppelschlag)。
- (以上 § 24)
8. ベーブンク Bebung・トレモロ Tremolo²⁾。(§ 25)
 9. 古い装飾音。
 - a) Zusammenschlag。
 - b) Zurückschlag。

- IV 恣意的装飾音 (Zufällig/willkürliche Verzierung)。
趣味や感情にゆだねられた装飾音であり小音符によって示される。小音符によって示されない場合は、作曲の知識を必要とする。
-

Ⅱ. 初版から第6版までの装飾音教程の比較

ここでIで明らかにした各版の装飾音教程の内容を比較し、その変遷を探る。

Ⅱ-1 各版の教程の進め方の比較

1) 初版から第4版まで

これらレーラインが目を通してのものは、前打音とそれ以外の装飾音に分けて説明をすすめている。まずはじめにそれぞれに属する装飾音を一覧表の形で提示し、それに補足説明を加える。

しかも、その補足説明はそれぞれの装飾音個別の奏法ではなく、気紛れな形で示された注意事項である。

しかし、初心者学習のための配慮したコメントが見られることは特徴的である。レーラインはこの教本の執筆に当たって、それまでの教本を初心者学習には適さないという批判し、初心者に適した物を目指していたからである。このことは、以下の序文からの引用が示している。

「たいていのこの種の教則本はこの楽器の初心者のために書かれているのはずなのだが、ある程度の完全さが前提として要求される。」³⁾

2) 第5版と第4版までの比較

前打音とそれ以外の装飾音に区分してすすめるという点は第4版までと変わらない。しかし、第4版まであった装飾音の一覧表は姿を消し、各装飾音ごとに譜例による例示を行いながら細かく文章で説明している。この点は第4版までと大きく変化する点である。

また、第5版になって装飾音を明確に分類する意図が見られる。例えば、前打音を長い前打音と短い前打音に区別したり、前打音とそのほかの装飾音の章を分けて違いを明確にしようとしている点である。

しかし、レーラインを受け継ごうという意図も散見される。例えば前打音の章で初心者へ配慮した記譜法の提案は初心者想定しすると言う点ではレーラインの意図を引き継いでいる。またこれに関して、装飾音についての章で、「装飾音の記号がC. P. E. Bachによって初めて公にされ、そのほとんどはクーブランによっている」、との記述は4版までのものとほぼ同じであると言って良い。

3) 第5版と第6版の比較

第6版ではそれまで区別されていた前打音とそれ以外の装飾音はまとめて Manieren というくくりで論じられるようになる。その代わりに新たに本質的装飾音、恣意的装飾音という新たな上位分類概念が登場する。これによれば、従来までの版では本質的装飾音しか教程に現れていないことになる。従って恣意的装飾音は全くの新出の装飾音となる。

また、本質的装飾音の中では音符で示される物とそれぞれ独自の記号で示されるものに分類されて教程が組まれる。ただしこの分類自体は初出のものであるが、その内容は第5版におけるのと変わらない。つまり、これまで前打音か前打音でないかで区別されていたものが、新たに区別しなおされたと言って良いだろう。

各装飾音が譜例を伴いながら文章で説明していくスタイルは第5版と変わっていない。

第5版まで見られた初心者への配慮は見られなくなる。

II-2 版ごとの内容の比較

1) 第4版までと第5版の比較

第5版で新出する内容は以下の通りである⁴⁾。

- ・短い前打音における10個の実例。
- ・具体的な奏法上の注意。
- ・小節をまたがるトリル。
- ・楽曲の切れ目におけるプラルトリラー。
- ・付点音符に付くドッペルシュラク。
- ・逆ドッペルシュラク。

2) 第5版と第6版の比較

第6版で新出する内容は以下の通りである⁵⁾。

- ・和音に付いた可変(長い)前打音
- ・不変(短い)前打音のうち、繰り返される音型につくもの、シンクペーションにつくもの、スタッカートにつくもの
- ・後打音 (Nachschlag)
- ・トリルの補助音の変位するとき(変位記号付きのトリル)。
- ・前打音に付くドッペルシュラク
- ・シュネラー付き前打音
- ・バッタマン
- ・トレモロ(ペープンクの中で論じられる)
- ・古い装飾音 (Zusammenschlag, Zurückschlag)
- ・恣意的装飾音 (willkürliche Verzierung)

II-3 装飾音教程の改訂の方向性

先に改訂されて新しく加わった内容を中心にまとめた。しかしながら、これら全てが全く新しい物と考え

て良いのだろうか。例えば、楽曲の切れ目におけるプラルトリラーは、同じプラルトリラーのなかで説明する具体的場面が増えたと考えた方が妥当である。このようなことは特に第5版において増えたと考えて良いだろう。他方で全く新しい装飾音の登場(先の考察では下線を引いておいた)もあるのだが特に第5版でも第6版で増えている。

このことより、第5版では各装飾音における説明をより詳細にし、各装飾音の使われる場面を多く設定することで、より具体的な説明を加えてゆこうとする方向に転換したと考えて良いだろう。また第6版ではその方向性を引き継ぎつつ、さらに説明する装飾音の幅を広げたと考えて良いだろう。

加えて、第5版以降は各装飾音の分類を明確にしていく傾向にある。このことは、雑ばくではありつつも簡潔性を有していた第1-4版のあり方を脱して、より詳細で些末な場合まで具体的に述べようとする方向に伴い、どうしてもこのような体系化が図られる必要があったのではないかと考える。

しかし、そう言う動きの中で初心者への配慮は失われてゆく。

III. 同時代の教本との比較

最後に若干の同時代の教本と比較し、検討を加えておきたい。ここで用いるのはレーラインの教本の初版と全く同じ年に第2版が出版されたマールブルク Friedrich Wilhelm Marpurg の Anleitung zum Clavierspielen (1.Aufl.1754. / 2.Aufl.1765) と第5版の出版の2年前1789年に出版されたテュルク Daniel Gotlob Türk の Clavierschule である。教程の進め方と内容構成を中心にそれぞれ簡単にまとめてみよう。

III-1 マールブルクの教本での装飾音教程

1) 教程の進め方

譜例は巻末にまとめられてはいるものの、譜例だけで示されるのではなく、文章による説明がそれぞれなされている。

2) 内容構成について

装飾音のなかに「作曲上の装飾」と「演奏上の装飾」の大区分をもうけている。これらは順にレーラインの第6版における「恣意的装飾音」と「本質的装飾音」に対応している。作曲上の装飾はさらに4つに分類されている。演奏上の装飾はペープンク、アクサン(前打音、後打音)、ドッペルフォアシュラーク(アンシュラーク)、シュライファー、ドッペルシュラク、トリル、モルデント、プレヒュンク(アルペジオ)。

Ⅲ-2 テュルクの教本での装飾音教程

1) 教程の進め方

譜例を本文中に伴って、文章でそれぞれ詳細な説明が加えられている。

2) 内容構成について

装飾音については3つの章が設けられ、第3章「前打音と後打音」、第4章「本質的装飾音」、第5章「恣意的装飾音」となっている。

前打音の章の中では可変前打音、不変前打音、後打音と分けられている。

本質的装飾音では小音符によって示されるもの（短い・長い2重前打音、短い・長いシュライファー・アンシュラク、シュネラー）、記号によって示されるもの（トリル、後打音の付く・付かないトリル、下から・上からのトリル、プラルトリラー、モルデント、アッチャカトゥーラ、バドマン、ドッペルシュラク）そしてこの両者の組み合わせによるもの（シュネラーのドッペルシュラク、下からのドッペルシュラク、プラルトリラー的ドッペルシュラク、ペーブンク、アルベジオ、リバットゥータ）の3種類に分類されている。

恣意的装飾音では3つに分類されている（フェルマータの装飾、カデンツァ、添加・変奏）

Ⅲ-3 レーラインの教本と同時代の教本との比較

1) 教程の進め方

レーラインの教本では1791年になって、文章を伴った詳しい説明となる。しかし、レーラインの初版と同年に出版されたマールブルクの教本はすでにそのような体裁をとっている。すでに18世紀半ばからはこういった説明の進め方をしていたものがあったわけであり、レーラインの教本の初版は非常に当時としても簡潔なものだったと推測できる。

2) 内容構成

レーラインの第6版に初めて現れる恣意的、本質的という区分は、すでにマールブルクの教本から出てきている。特に恣意的装飾音は単なる装飾音と言うよりも、即興演奏の色合いの濃いものであり、第5版までは初心者への配慮から出現しないことは理解できることである。

このような「本質的／恣意的」、「前打音（後打音）／それ以外の装飾音」、という区別はマールブルク、テュルクともに現れていることから、当時は一般的にこのような分類が混在していたものと思われる。

Ⅳ. まとめ

レーラインの教本初版から第6版までにおける装飾音教程に注目してそれぞれの内容を確認しつつ、その変遷を明らかにしてきた。

その結果、レーラインの手による改訂である第4版までは装飾音の一覧表をのせることで事実上説明を終始し、雑ばくながらも簡潔に教程にすすめながら初心者への配慮を大きくとっていたことがわかった。

第5版になって改訂者が代わると、譜例を交えながら言葉で当該の装飾音の使用場面ごとに具体的に説明を加えていく傾向が始まる。第6版ではさらに改訂者が代わるが、この傾向はさらに強くなってゆく。それでいて、それほど装飾音の数が増えたわけではない。このことは、より多くの装飾音を説明しようとするのではなく、それぞれの装飾音を多く説明しようとする意図が反映されていると考える。

また、構成に関してはより体系系を持たせようとする傾向にある。このことは、第5版、第6版で装飾音の分類をより一層明確にすすめていくことに現れている。

しかし、一旦レーラインの以外の教本に目をうつしてみると、第5版、6版に入って現れる体系化と細かな具体的説明は以前からあるものである。このようなことから、レーラインの教本に時代が下るに見られる体系化の傾向は、歴史的に変遷との関連は少ないと言える。むしろ、校訂者がどのような整理をするかと言う考え方の違いと考えられる。

レーラインがこのような体系的に記述することを知らなかったわけではないだろう。従って第1-4版は初心者への配慮を中心に、平易で簡潔な説明をレーラインが心がけた結果であると思われる。他方第5版第6版も込み入って入るとはいえ、具体的に細かなことまで説明するといういわば良心的な配慮であるとも考えられる。

【注】

- 1) ONO, Ryosuke. "Eine "long seller Clavierschule" im 18. u. 19. Jh" in 『音楽文化教育学 研究紀要』 XVII 2005 (広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学講座) s103-110
- 2) ペーブンクとトレモロが同列に取り扱われていることは、楽器の変化と絡んで非常に興味深い話題であるが、ここで議論することは割愛する。
- 3) Löhlein (1. Auf; 1765, 2. Auf; 1773, 3. Auf; 1779, 4. Auf; 1782) Vorrbericht
- 4) なお第5版になって初めて出てくる「Prallende-

doppelschlag プラルトリラー的ドッペルシュラク」は第4版まで後打音付きアプツーク、として出ているので、名称の問題であり新出とはしなかった。

5) なお、アンシュラク、シュライファーは通常のものと同付点音符になるばあいはそれぞれ第5版での短い場合と長い場合と同じなので新出とはしなかった。また、逆ドッペルシュラクとプラルトリラー的ドッペルシュラクはその他希な本質的装飾音に含まれているが、第5版ではドッペルシュラクの中に含まれていたため、新出ではない。

【主要引用・参考文献】

Georg Simon Löhlein, „Clavier=Schule“ Leipzig und Züllichau (1. Aufl; 1765, 2. Aufl; 1773, 3. Aufl; 1779, 4. Aufl; 1782)

Georg Simon Löhlein, „Clavier=Schule“ Leipzig und Züllichau 5. Aufl; 1791 Vermehrte und umgearbeitet von Johann Georg Witthauer

Georg Simon Löhlein, „Pianoforteschool, Clavier=Schule“ 6. Aufl. 1804 Jena. Vermehrte und umgearbeitet von August Eberhard Müller

Friedrich Wilhelm Marpurg, „Anleitung zum Clavierspielen“ 2. Aufl. 1765 (1. Aufl. 1754) Berlin

Daniel Gottlob Türk, „Clavierschule“ 1. Aufl. 1789 Leipzig und Halle

なお、訳語に関しては上記のテュルクの教本の翻訳である『テュルク クラヴィーア教本』（東川清一訳）春秋社2000を参考にした。

(主任指導教員 千葉潤之介)

譜例1 レーラインの教本第1-4版までの Vorschlag の一覧表

出典：G. S. Löhlein Clavier=Schule 3. Aufl. 1779 (Staatsbibliothek zu Hamburg) s.14

譜例2 レーラインの教本第1-4版の Manieren 一覧表

出典：G. S. Löhlein Clavier=Schule 3. Aufl. 1779 (Staatsbibliothek zu Hamburg) s.15

